

平成 22 年度公開教学講座「現代社会と天理教」(1)

第7講：陽気ぐらしの世界をめざして一大きなつながりの中で—
宮田 元

私たちは、今日、高齢化社会、少子化の時代、無縁社会などといわれている現代に生きている。時代の波に大きく揺れ動き、さまざまな変化をみせる現代社会の中で、私たちはいろいろと問題を抱え込んで、ややもすると方向づけを見失いがちになるような現実を認めざるを得ない状況におかれているといえよう。このような中で、改めて人間の幸福についての問題が論議的となってきている。ここでは、この流動する現代において、真の幸福につながる陽気ぐらしの世界へ向けて、私たちはどのように生かされ生きているのか、考えてみたい。

* * *

現代における幸福感の問題として、物質的豊かさや幸福の関係がよく取り上げられる。これは、GDP（国内総生産）と幸福の関係の調査にも見られるように、一人当たりの GDP が一定水準に満たない場合は「不幸」であるが、一定水準を超えると、GDP と幸福度の間には関係が見られなくなるということである。幸福が個人の問題としてでなく、国民生活の問題として看過できないところから、ブータン国王は、1972 年に、仏教文化に根ざすブータン文化に見合う経済開発のアイデアとして、GNH（国民総幸福）の指標を提唱した。フランスのサルコジ大統領も、2009 年に、ブータンの GNH 方式を採用し、従来の GDP の国富計算には欠点があるとして、レジャー、幸福、健康、教育、社会的連帯、環境、治安、政治制度などを加味することが必要であるとしている。（島村力「アメリカの幸福学」『海外事情 2010-6』拓殖大学海外事情研究所、100～101 頁）

カントは、『道徳形而上学原論』の中で、他者とは無関係な「快適な生活」といった物質的幸福と、他者への義務に基づく道徳的幸福とを区別し、後者の優位を論じている。しかし、近代社会はカントの意に反して、「快適な生活」といった物質的幸福を追求することによって発展してきた。経済的発展の行き詰まりが明らかになりつつある現在、他者との関係性の中に幸福があるという原点を押さえておくことは有益であると指摘されている。（山田昌弘「幸福論」『中央公論』2010 年 8 月号、119 頁）

かつてわが国の高度成長期にあっては、消費社会での幸福が積極的に求められていた。そこでは、豊かな家庭づくりのために、テレビ、ファミリーカー、家などが買われることによって、家族全員の幸福が考えられていた。そこには家族のつながりがあった。しかし、価値の多様化とともに、消費主体が家族から個人へと交代し、消費の個人化によって、ブランド商品が買い求められるようになる。家族よりも個人が優先され、やがて個人にとって家族は他者となり、家族の形成・維持が難しくなってきた。今日では、自分の心の中で幸福をもつだけでは足りずに、他人とのつながりの中に幸福を求めようとしている。ここには、つながりの重要性が認められてきているといえよう。幸福には、自分の存在を肯定する自尊心と、自分の居場所が仲間の中にあるという他者からの承認、さらには貢献感が必要とされ、また、人生という長い時間を考え、充実した時間をもつという、

時間の重要性も指摘されている。（山田昌弘他『幸福の方程式』ディスカヴァー携書、87 頁）

* * *

月日にわにんけんはじめかけたのわ

よふきゆさんがみたいゆへから 14 号 25

と、「おふでさき」に示されているように、親神は、人間が陽気ぐらしをするのを見て共に楽しみたいとの思いから人間創造を始められた。親神の温かい守護により、すべての人間は陽気ぐらしができるようにと可能性を与えられているにもかかわらず、現実には陽気ぐらしとは程遠い状況に置かれていた。天保九年十月二十六日、世界中の人間をたすけるために、親神は、教祖を「月日のやしる」として、初めて親神の深い思いを明かされた。これによって、人間を創造された親神は私たち人間の親であり、世界中の人間は親神の可愛い子供であり、私たち人間はお互いに親を同じくする「一れつ兄弟姉妹」であることを知ることができたのである。今、私たちは、親神の守護により、親神の望まれる陽気ぐらしの世界へと導かれて、生かされ生きている過程の中にあるといえよう。

「この世は神のからだ」と教えられているように、人間は神の働きに満ち満ちた大自然の中で、親神の懷住まいをしている。さらには、私たちは親神の守護を受けた「かしの・かりもの」の身体をお借りして、親神に温かく二重三重に守られ、生かされている事実を目を向けることができる。

「元の理」の壮大な物語に示されているように、創造以来、人間はこの世に幾度となく生まれ変わり出直しを繰り返して今日に至っている。今ここで、長い歴史という時間を縦軸に、広い宇宙という空間を横軸にとるとき、私たちは親神との大きなつながりの接点に生かされているということができよう。

親神は人間をたすけ、陽気ぐらしの世界に導くに当たって、何よりも人間の心を問題にしておられる。人間の心はほこりがつきやすいものであるために、絶えず心のほこりを掃除しなければならない。さらに、親神は人間がたすかり、陽気ぐらしができるようにと「つとめ」と「さづけ」を教えられ、親神への感謝と喜びをあらわす「ひのきしん」とどんな中でも喜び勇む「たんのう」を通して、心の入替えをすることができると教えられた。

これから八月日たのみや一れつわ

心しいかりいれかゑてくれ 12 号 91

この心どふゆう事であるならば

せかいたすける一ちよばかりを 12 号 92

と、「おふでさき」に述べられているように、親神は人をたすける心を何よりも喜ばれる。また、「皆んな勇ましてこそ、真の陽気という。めんへ楽しんで、後々の者苦しますようでは、ほんとの陽気とは言えん。」（明治 30・12・11）と、お言葉にもあるように、世界中の人間が互いに勇ましあって、ともどもに喜び楽しむことができるとき、人々の心は澄み切って、かんろだいを中心に真の陽気ぐらしの世界が実現すると教えられている。

私たちは、教祖が身をもって示された陽気ぐらしへの道、すなわちひながたの教えの実践を通して、大きなつながりの中で生かされ生きている事実を目覚め、ともどもにたすけあい、陽気ぐらしの世界をめざして喜び勇んで歩んでいきたい。

シンポジウム「第1回 宗教と環境——地球社会の共生を求めて」が開催

佐藤孝則

平成22年11月6日午後、東洋大学白山校舎で宗教・研究者エコイニシアティブと東洋大学共生思想研究センターの共催によるシンポジウム「第1回 宗教と環境——地球社会の共生を求めて」（後援：環境経営学会、東洋大学「エコ・フィロソフィ」学際研究イニシアティブ）が開催された。宗教関係者や研究者など約170名が参加した。

宗教・研究者エコイニシアティブ代表で東洋大学教授の西山茂氏による開会挨拶の後、2題の基調講演がおこなわれた。山本良一（東京大学名誉教授）による「低炭素革命の成否と人類の未来—宗教に期待するもの」と、藺田稔（京都大学名誉教授（秩父神社宮司））による「日本人の伝統的環境観—神・人・自然のつながり」だった。

西山氏は宗教者と科学者が協働して今日の環境問題に対処する必要があると強調した。山本氏は今日の深刻な地球規模の温暖化問題を多面的に紹介し、個人レベルでなく社会レベルでの構造改革を図るべきだと説き、「地球生命圏」存続のためにも宗教者の役割は大きいと強調した。また、藺田氏は日本人がもつ宗教的な自然観に焦点をあて、風土性との関連で神と人と自然の関係を平易に説いた。

基調講演後、竹村牧男（東洋大学長）がコーディネーターを務め、「環境危機に対して宗教者は今、何をなすべきか？」のテーマでパネル討論がおこなわれた。パネリストとして、原井慈鳳氏（法華宗菩薩行研究所長）は「エコを進める菩薩行とは何か」、深田伊佐夫氏（立正佼成会中央研究所研究員）は「自然への感謝の心をどう養うのか」、山岡睦治氏（生長の家出版・広報部長）は「ISO14001 認証取得から“炭素ゼロ”へ」、桑折範彦氏（徳島大学名誉教授、日本聖公会員）は「環境・温暖化とエネルギー」、内藤欽風氏（日蓮宗妙宗山朝善寺）は「持続可能なシンプルライフのすすめ」について発言し、意見を交わした。

このシンポジウムには真言宗、浄土宗、日蓮宗、法華宗、曹洞宗、生長の家、立正佼成会、金光教など各宗教関係者のほか、東洋大学、日本大学、中央大学、国際基督教大学、東京富士大学、鈴鹿短期大学などの大学関係者、さらに大林組、清水建設、グッドバンカー、ベターリビング、三菱総研、環境経営格付会社（SMRI）、日本経済人懇話会、精神文化映像社など企業関係者も多数出席した。天理教からは岩田長太郎総務部長と柏木安功総務課員、そして私の3名が出席した。

シンポジウムに関する記事は、一般紙では『産経新聞』に、宗教業界紙では『仏教タイムス』に、そのほか『新宗教新聞』、『佼成新聞』、『聖使命』などに紹介された。

このシンポジウムに出席して、環境問題解決に向けた宗教者と科学者との協働（パートナーシップ）の必要性を再認識できたが、パネル発表をおこなった各教団・宗派の自然観・環境観との関連性が希薄で、相互の議論に深みを感じられなかった。むしろ、各教団・宗派の発表の場にとどまった感は否めない。パネリストが5名と多かったことも一因だったかもしれない。

いずれにしても、第1回目ということもあって、このシンポジウムは総花的な印象を受けた。

日本生命倫理学会にシンポジスト参加

金子 昭

日本生命倫理学会第22回年次大会が11月20、21日の両日、藤田保健衛生大学を会場に開催された。教団付置研懇話会（生命倫理研究部会）は、初日に公募シンポジウム「宗教は『いのち』をどう語ってきたのか？—近現代における『いのち』観の変遷—」を行った。

オーガナイザーは葛西賢太（宗教情報センター）、島藺進（東京大学）の両氏。シンポジストは発表順に金子昭（天理大学おやさと研究所）、土井健司（NCC宗教研究所・関西学院大学）、新田智通（武蔵野大学仏教研究所）の3名。私の発表は「新宗教の『いのち』観—その深められた現世救済と生命倫理への関わりを問う—」である。内容は新宗教の立場から生命倫理を問う際、そこでの言説に着目して、その「いのち」観の“ゆらぎ”と模索から、現世救済の志向の深化について考えるというものである。事例としては、脳死・臓器移植問題への天理教の対応の変遷について取り上げた。

土井氏は「キリスト教における生命至上主義批判とQOLの概念」というテーマで、生命至上主義の批判を行ったR・マコーミックの生命倫理論を取り上げ、新田氏は「真宗大谷派における『いのち』をめぐる言説と生命至上主義」というテーマで、同派の近代教学における「いのち」観について批判的検証を行った。

教団付置研懇話会では4回目の公募シンポジウムになるが、今回は参加者もこれまでで最多の70名を超えた。今後も、こうした研究発表という形で、生命倫理についての学際的な議論の場に、宗教の言葉を届けていきたいと考えている。



パネルディスカッションの様子

「生殖革命」と人間の未来シンポジウムに参加

金子珠理

10月30日、日本女子大学で開催された標記シンポジウム（知と文明のフォーラム、日本女子大学現代女性キャリア研究所、同人間社会学部文化学科共催）に参加した。代理出産や不妊治療など、人類がかつて直面したことのない生命への人為的介入を、文明論的にどう考えるべきか。2009年に逝去したエコフェミニスト・青木やよひの問題提起に応える形で、江原由美子、中嶋公子、長沖暁子の発題をもとに議論が展開された。

第 232 回研究報告会

「大和医院と元大和医院蚌埠分院看護婦所蔵資料等について」

国際学部言語教育研究センター准教授 深川治道

1943 年（昭和 18）に天理教が派遣した医療班の一員として中国に渡り、その地に設立された大和医院に看護婦として勤務していた岡田キミ姉に、2010 年 10 月に筆者はお目にかかった。当時のお話を伺い、同姉が戦後の引揚げの際に持ち帰ることのできた貴重な写真や実物資料をお借りしたので、それらの資料等を見せながら報告を行った。

まず本報告会においては、戦前の大和医院以前の天理教医療伝道について簡単に触れた。そして、主に当時の『天理時報』に掲載された大和医院関係記事を参考にして、大和医院のあゆみを振り返った。

大和医院については、院長であった神尾知博士がいくつかの著書の中で触れている。また、本誌で筆者が連載中の上海伝道関係資料にも関連する記述がある。さらに、おやさと研究所が 2003 年に行った伝道フォーラムの中の発表の一つとして、大和医院の職員であった澤田定興氏が講演を行い、2004 年に同研究所から出版された『天理教の活動と上海伝道庁』にその内容が掲載されている。また、2006 年には同氏による『大和医院への思い』が同研究所から出版されているが、今回当時の看護婦の方から直接大和医院に関する話を聞くことができたのは得がたい機会であった。しかも、澤田氏は大和医院遠く本院勤務であったのに対し、岡田姉は大和医院蚌埠分院勤務であったので、これまであまり知られていなかった蚌埠分院に関することも教えていただくことができた。

岡田キミ姉は北海道出身、旧姓高橋で、戦後同じ北海道の道北分教会の岡田正春氏に嫁いだ。正春氏も大和医院蚌埠分院に職員として勤務していた。しかも、正春氏は大和医院に勤務する前は、天津天理日華語学校に勤務していたということが分かったが、私が岡田姉を訪問する少し前に正春氏は出直されていた。実は、筆者はかつてこの学校について調査し、『おやさと研究所年報』などにその成果を掲載させていただいたが、正春氏の名前は私の調べた資料の中には見出せていなかっただけに、残念だった。

岡田姉は大和医院関係の写真を数十枚所蔵されていた。これまで筆者が調査でお会いしたことのある戦後引揚げの方々からは、ほとんど写真を日本へ持ち帰ることができなかったと聞いていただけに、この写真の数は驚きであった。さらによかったことは、岡田姉がその写真に写っている人々の多くの名前を覚えておられることである。これまで大和医院の医師、看護婦、職員については、澤田氏の著書や、戦後大和医院関係者で作られた「大和会」の名簿などで知ることができるが、写真に写る人物の名前が特定できるのは、神尾院長をはじめとした一部の人物の名前に限られていたのではなかろうか。もちろん、一人ひとりの人物の家族に聞けば、人物特定は可能であろうが、そのような調査は現実的には難しく、また、家族であっても、年月が経るにしたがって、人物の特定は困難になっていくのではなかろうか。今回岡田姉によって、写真に写る多くの医師や看護婦、職員の名前が特定できたのは大きな収穫であったと思う。

なお、本報告会においては、岡田姉所蔵の 1943 年（昭和 18）7 月に教会本部東講堂で行われた壮行会の記念写真を映し、そこに写る人々について名前などを簡単に紹介し、その他の写真については、簡単な画像紹介にとどめた。

すでにこれまでの本誌連載の拙稿で記したが、大和医院の医師、看護婦、職員は一部を除き、戦後上海に集結した後も、そこで開設された診療所で医療活動を行っていた。その際、彼らが診療施設の外へ出て上海の街に行く時は、「日僑」と記された腕章をしなければならなかった。岡田姉は自身と夫の正春氏の腕章を当時の状態のまま所蔵していた。さらに、正春氏が戦争末期に応召した際に使った「奉公袋」と、正春氏の大和医院在職中の名刺も同じ箱の中に所蔵されていた。本報告会ではこれらの実物も紹介した。なお、これら腕章などについては、岡田姉ご本人から、可能であれば天理参考館への寄贈を希望されていたので、天理参考館の担当者に伝えたところ、受領が快諾された。



釜山上陸後、華中へ向かう途上、北京の華北伝道庁を訪れた医療班第 1 次隊の一行（昭和 18 年 8 月初め）

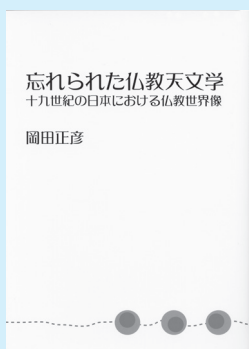
（4 頁からの続き）

【註】

- （1）『中支宗教大同聯盟年鑑』（以下「宗聯年鑑」と略す）としては、これが最初のものではないと思われる。なお、筆者は 2004 年 11 月に金光教学研究所で同研究所蔵の昭和 17 年 12 月 1 日現在の宗聯年鑑を写真撮影させていただいたが、これ以外に宗聯年鑑があるかどうかは不明。
- （2）住所は宗聯の本部のもの。本資料の宗聯年鑑によると、宗聯結成の準備委員会は「乍浦路」の西本願寺に置かれたとあるが、この本部の住所は各教宗派の所在地には見当たらない。尚、これらの所在地は上海伝道庁のあった靶子路から近い。福田闡正氏は当時宗聯の理事長兼仏教部長。
- （3）路上か広場の一画のようなところに椅子を置き、その上に立って人々に話をしている写真には「故若尾金造氏の中國人傳道（太倉）」とキャプションが付けられている。若尾氏は 1938 年に「東亜伝道会」の伝道師として中国の太倉（江蘇省、上海の北西に位置する町）へ渡り、「憩いの家」を作って中国人被災者のために給食、厚生、医療事業を興し、中国人教会と合同礼拝を持つまでに信頼を得たが、病のために 1940 年 5 月に急逝したという（『日本キリスト教歴史大事典』参照）。
- （4）〇〇〇は原文のままで伏せ字。

（次号に続く）

新刊案内



岡田正彦著『忘れられた仏教
天文学—十九世紀の日本に
おける仏教世界像』
ブイツーソリューション、
2010年11月刊行

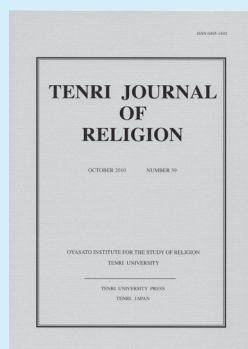
徳川吉宗の実学奨励と禁書の緩
和令を受けて、西洋の天文学理論
が一般の人々にも紹介され始めた
19世紀の初め、一人の仏教僧・普

門円通は、主著である『仏国曆象編』（1810）を刊行し、須
弥山を中心とする平らな仏教世界像を前提にした仏教天文学
の理論を確立して、地球説と地動説にもとづく近代科学の自
然観に対抗しようとした。

梵曆あるいは仏曆とも呼ばれた円通の天文学理論と、須弥
山を中心とした平らな世界の実在を主張する思想は、その後
多くの弟子たちに受け継がれて、「梵曆運動」と呼ばれる思想
運動を展開することになる。19世紀の日本思想史のなかで異
彩を放つ、この特異な天文学の意義を再考し、従来の日本宗
教思想史・仏教思想史に一石を投じることが、本書の目的の
一つである。

円通とその門弟たちの活動は、19世紀の仏教系の思想運動を
代表するような広がり多様な展開を示しながら、20世紀の初
頭には完全に忘れ去られてしまう。この忘れられた思想運動の全
容を明らかにし、その忘却の意味を問いつつ、排仏と護法、伝
統と近代、といったステレオタイプにもとづく、これまでの近代
仏教史、近代日本思想史の基幹的な言説を再考する（全308頁）。

＊定価1,575円（税込）。ご希望の方は、amazon.co.jp（アマ
ゾン通販）から購入できます。



『Tenri Journal of Religion』
October 2010 Number 39

おやさと研究所はこの度、
『Tenri Journal of Religion』39号
（頒価1,000円）を発刊しました。
本書を希望される方は、研究所
事務室へお申し出ください。

CONTENTS

Masahiko OKADA : New Historical Science and Studies of Tenrikyo's
History: A Study of Tenrikyo Dendōsha ni Kansuru Chōsa

Teruaki IIDA : On the Themes and Tasks of Tenrikyo Theology:
Learning from a Predecessor

Susumu MORI : "The Path of Single-Hearted Salvation" and
"Spiritual Growth": From a "Trouble" to a "Knot"

Harumichi FUKAGAWA: War and Peace as Seen in the Ofudesaki
and the Mikagura-uta

Tenri International Workshop 2010 (March 26):
Life, Death, and Dying in Intercultural Perspective
Midori HORIUCHI : Death from a Tenrikyo Perspective

Miran BOZOVIC: Death in Early Modern European Thought

Yoshitsugu SAWAI: Meanings of Life and Death in Asian
Religious Traditions: A Semantic Perspective of Religion

Maja MILČNSKI: Death as a Soteriological Problem: Faith,
Myth and Reason

『グローバル天理』年間購読のご案内

原則的に新年度は1月号からとなっております。購読料につい
ては、送料のみの実費負担です。申し込みは、封書、FAX、メール
でお願い致します（お電話での申し込みはご遠慮下さい）。毎月の
希望冊数と、氏名（フリガナも）、郵便番号、住所、電話、FAX、
E-Mail、職業をお知らせ下さい。申し込み受付後に振込み用紙を
送付致します。切手・現金でのお支払いはご遠慮下さいますよう
お願い致します。振込みを確認後、発送させていただきます。

送料（ヤマト運輸メール便）

全国一律、A4（角2）厚さ1cmまで（10冊まで）
80円でお届けします。

11冊以降は160円になります。

例 毎月1～10冊購読 80円×12ヶ月＝960円
毎月11冊～購読 160円×12ヶ月＝1,920円

問い合わせ先：

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

天理大学 おやさと研究所 「グローバル天理」編集部

FAX 0743-63-7255 E-Mail: oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

第7回伝道フォーラム

「ネパールの天理教」

入場無料・来聴歓迎

天理教のネパール伝道は、1960年中山正善二代真柱のネパール巡教が端緒とされている。ネパールは、宗教的には包容力のあるヒンドゥー教および仏教が渾然一体となっている文化背景を持つ一方、世界の最貧国の一つとしても知られている。それゆえ、天理教の教えを聞いてはくれるけれども、その理解の実際は捉えにくいともいえる。経済的な理由から、「日本」人と親しくするという事も考えられる。社会的政治的にも、長い鎖国政策やインドと中国とに挟まれた地理的要因から、両国の影響力は甚大である。ヒマラヤ山脈は、ネパールを陸の孤島にする要因ともなっており、2大国への依存度

は非常に高い。

こうした背景を持つ国での布教は、①多神教世界への布教、②経済格差のある地域への布教、③多民族／多言語国家での布教、④国教（現在は規定なし）との関係、⑤カーストへの対応など、いくつもの視点が必要となる。

今回は、そのネパールで初代の連絡所長を務め、長くネパール布教に携わってこられた大向良治氏をメインの講師に迎えて、ネパールでの布教伝道の特徴などについて語っていただく。また、現在、天理大学に学ぶ2人の学生に自らの天理教体験を話してもらい、ネパールをより理解したいと考える。

講演者 <題目は仮題>

大向良治「ネパール連絡所の始まり」

成田道広「天理教ネパール布教の現況概観」

ビヴォール・ヴァルマ「親からの信仰」

ラジェンドラ・タパ「入信の動機と天理大学」

日時：平成23年3月25日（金）

午後1時から

場所：天理大学研究棟3階第1会議室

問い合わせ先：

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050 天理大学 おやさと研究所

FAX 0743-63-7255 E-Mail: oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

— お 知 ら せ —

天理大学 おやさと研究所
平成23年度公開教学講座

「現代社会と天理教」(2)

世界が大きく激動している今日、私たちの価値観や身の回りの生活もしだいに変化し、いつのまにか多様な価値観が生まれてきました。しかしその価値観は、ややもすると利己的な価値観となっており、「我さえ良ければ、今さえ良ければ」の風潮を拡大・助長する危険性をはらんでいます。そのような現代社会の中で、私たちが日々考え行動する拠り所は、常に天理教の教えに基づくことは言うまでもありません。

この講座では、「現代社会と天理教」というテーマのもと、2年間にわたって天理教の教えに基づく生き方、行動のあり方を、現代社会における具体的事例の中から考えていきたいと思います。

多くの皆さまの参加を、お待ちしております。

場所：天理教道友社6階ホール（予定）

時間：13:00～14:45

第1講	4月25日（月）	佐藤浩司
第2講	5月25日（水）	森 洋明
第3講	6月25日（土）	辻井正和
第4講	7月25日（月）	佐藤孝則
第5講	8月25日（木）	深川治道
第6講	9月25日（日）	野口 茂
第7講	10月25日（火）	井上昭洋
第8講	11月25日（金）	金子 昭
第9講	12月25日（日）	深谷忠一

※お車での来場はご遠慮下さい。

グローバル天理

第12巻 第1号（通巻133号）

2011（平成23）年1月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 深谷忠一

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <http://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/j-home.htm>

E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

印刷 天理時報社

Printed in Japan